

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：28003

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13341

研究課題名（和文）和歌・和文から見た琉球・日本の文化交流

研究課題名（英文）Cultural exchange between the Ryukyu Kingdom and Japan: Focus on Waka and Wabun

研究代表者

屋良 健一郎 (Yara, Kenichiro)

名桜大学・国際学部・上級准教授

研究者番号：40710158

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、琉球の士族によって書かれた和歌・和文を主な調査対象とした。琉球の和歌・和文の所蔵先について把握することにつとめ、また、主な作品については注釈、現代語訳を行うことで内容をより深く理解することを目指した。その上で、近世の琉球と薩摩との交流の一端や、日本・薩摩の影響を受けた琉球でどのように和歌が受容されていったのかについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまであまり本格的に研究がなされることのなかった琉球士族による和歌・和文をとりあげた。和歌・和文に記された内容からは、近世の琉球と薩摩との交流や、当時の社会や文化を垣間見ることできる。従来の研究で見落とされがちであった琉球の和歌・和文に着目し、それらの内容を紹介するとともに、琉球における和歌の受容のあり方の一端を提示したのが本研究の意義と言えよう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate cultural exchange between the Ryukyu Kingdom and Japan. The subjects were Waka and Wabun written by Ryukyuan in the Edo period. We interpreted Waka and Wabun, and analyzed the influence of Japan upon the Ryukyu Kingdom.

研究分野：日本史・琉球史

キーワード：和歌 和文 注釈 和歌史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、琉球の人々と薩摩をはじめとする日本の人々との文化交流を探ることを目的とした。琉球と日本との関係の歴史をめぐっては多くの研究成果があるが、その中において文化的な交流に着目した研究は決して多くはない。そのような研究状況を背景に、本研究では和歌・和文に着目し、それらを通して見られる琉球と日本との文化交流を考察したいと考えた。また、文学作品を分析することで、その作者と周囲の人々との個人と個人との交流も垣間見られる可能性があり、国と国との外交といった観点とはまた違った交流の姿に迫れるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、和歌・和文の分析を通して、近世の琉球と日本との文化交流のあり方を明らかにすることを目的とした。琉球では、1609年に薩摩島津氏の侵攻を受け、その支配下に入って以降、主に士族層において日本文化の受容が進んだ。その中で、和歌を詠み、やまとことばを用いて散文(和文)を記す士族も見られるようになった。士族が和歌・和文を身につけた背景には、薩摩藩士との交流に必要だからということもあった。そのため、和歌・和文を分析することは、琉球士族と薩摩藩士との交流を知る上でも重要だと考えられる。

また、琉球士族の和歌・和文については、1980年代から90年代にかけて池宮正治による先駆的な研究がなされたものの、その成果が十分に継承、深化されているとは言い難い。本研究は、琉球の和歌・和文を丁寧に読むことで、和歌・和文の研究対象としての価値の再発見も目的としていた。

3. 研究の方法

本研究では琉球士族が記した和歌・和文について、(1)所在の確認、(2)作品の読解、(3)作品を踏まえた文化交流の考察、という3つの点から主に研究を進めた。(1)については、沖縄県内の個人宅、県外の博物館や図書館などに赴いて調査を行った。(2)については、日本文学研究者・琉球文学研究者と共に研究会を重ねることで作品の翻刻・注釈・現代語訳の作業を進めた。(3)については、他の様々な歴史資料を用いながら考察を行った。

4. 研究成果

本研究の成果としては、近世の琉球士族の和歌・和文の読解を進めたことが挙げられる。本研究においては、作品の翻刻・注釈・現代語訳といったプロセスに当初の予定よりも多くの時間を費やした。その成果の一部は出版した図書(共著)にも反映されており、多くの人が参照可能なものとなっている。結果として、本研究は和歌・和文を対象とした基礎的なものに終始してしまったように思うが、和歌・和文という、従来、必ずしも十分に研究が深められてこなかった作品群をとりあげ、研究成果として紹介できたことは、今後、当該分野の研究が進められる上で意義のあることと考える。なお、翻刻・注釈・現代語訳を行った作品のうち、未発表のものもあるため、引き続き、成果の発表を続けたい。

また、琉球の和歌・和文の所在の確認については、新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、充分とは言えないものの、県内外で調査を実施した。これにより、和歌・和文の作品の所在について、ある程度は把握できたものとする。また、調査の過程で、従来の研究では検討されてこなかった和歌作品の存在に気付くことができた。その作品については、今後、検討を進めていきたい。

上記の通り、本研究では、作品の翻刻・注釈・現代語訳に多くの時間を費やし、作品を踏まえた琉球・日本との文化交流については、当初に予定していたほどには検討できなかったように思う。しかしながら、可能な限り、研究成果の発表に取り組んだ。2022年7月には、翰林大学校日本学研究所の主催によるオンラインでの国際シンポジウム「文学：ポスト帝国の文化権力を考える」において、琉球・沖縄の和歌・短歌の歴史に関する報告を行った。この報告では、本研究の成果を踏まえ、近世琉球の士族と日本の文化人との和歌を通じた交流、琉球士族にとって和歌が持つ意味について紹介した。また、2023年3月には所属する大学(名桜大学)において、本研究の成果を踏まえた研究会「戦国・江戸時代の和歌」を実施し、地元市民にも参加を呼びかけた。この研究会と時期を同じくして名桜大学附属図書館において「琉球の和歌」という展示を実施した。この展示では、本研究を進めるなかで収集した資料を展示すると共に、研究成果を踏まえた解説文を示した。このような機会を通して、本研究の成果や、琉球士族の和歌・和文という、一般的には必ずしも有名ではない作品群の存在や意義について、海外の研究者や地元市民の方々に紹介することができた。

なお、今後の課題としては、近世と近代との架橋が挙げられる。これまで、琉球の近世和歌の研究は近世を専門とする研究者が、沖縄の近代短歌は近現代を専門とする研究者が行っており、近世和歌の研究と近代短歌の研究との間には距離がある状態だと言えよう。しかしながら、近代初頭の沖縄においては、近世の和歌作者が依然として一定程度の影響力をもっていたと想

像されることから、近世和歌と近代短歌とを完全な断絶として捉えるのではなく、近世と近代をつなぎ、近世和歌の作者たちの「その後」、近世の和歌・和文をめぐる交流の「その後」を追う必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 島村幸一・小此木敏明・屋良健一郎	4. 巻 58
2. 論文標題 「琉球文学」資料注釈5 『思出草』下	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立正大学人文科学研究所年報	6. 最初と最後の頁 17-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 屋良健一郎	4. 巻 55
2. 論文標題 漂着から見た近世の琉球と日本	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 説話文学研究	6. 最初と最後の頁 102-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島村幸一・小此木敏明・屋良健一郎	4. 巻 57
2. 論文標題 「琉球文学」資料注釈5 『思出草』上	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立正大学人文科学研究所年報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 屋良健一郎
2. 発表標題 近現代沖縄における短歌の展開
3. 学会等名 翰林大学校日本学研究所国際シンポジウム「文学：ポスト帝国の文化権力を考える」（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 屋良健一郎
2. 発表標題 漂着から見た近世の琉球と日本
3. 学会等名 説話文学会2019年度9月例会シンポジウム「 異域 説話をめぐって」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 屋良健一郎
2. 発表標題 和歌・和文から見た近世の琉球と日本
3. 学会等名 沖縄文化協会2019年度公開研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 島村幸一、小此木敏明、屋良健一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 496
3. 書名 訳注琉球文学 『佐銘川大ぬし由来記』『周蘭両姓記事』『思出草』『浮縄雅文集』『雨夜物語』『永峰和文』	

1. 著者名 島村幸一、横山學、真栄平房昭、屋良健一郎、嘉手苺徹、橋尾直和	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 472
3. 書名 琉球船漂着者の「聞書」世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------